

これは「復興」ですか？ 一時帰宅

写真は岩波書店『科学』2019年12月号の表紙。フォトジャーナリストの豊田直巳さんによる連載。いつも福島の今を考えさせられる。写真とともに紹介したい。

「まだ8カ月しか住んでいなかったの。」と話す菅野みずえさんの口調に、悔しさを私は感じ取れなかった。築180年だったという旧家の太い柱や梁を活かし、モダンでオシャレに建て直した家だが、避難して8年半も経ったからか、それとも8年半も不在だったことを私が知っているからか。菅野さんのこころの奥の葛藤までは、私だけでなく、本当は誰にもわからないように思える。

もうこの家には住まないだろうし、かといって今のところ解体するつもりもないと菅野さんは言う。一方で、母屋以外の門や倉庫などは解体してきれいにする予定だとも。

そして、菅野さんは8年前のあの光景を話し始めた。「うちには25人、避難してきた人を受け入れていたの。そして外に出たときに、白い防護服を着た人たちに大きな声で言われたの。『なんでこんな所にいるんだ！ 頼む、逃げてくれ』って。」何も知らされていないなかった彼女の時間はそのときから止まったままで、今はまた別な時間を生きているのだろう。その止まったままの津島（浪江町）での時間を再スタートさせるような復興など、奇蹟でも起きない限りあり得ない。

伸び放題の草木に覆われていく大きな門を入り、中の様子確かめる菅野みずえさん。この門も解体予定だという。写真はすべて9月30日、浪江町津島地区で。

以下、上から写真の説明である。

「金がなかったから、こっちは改装が終わっていなかったの」というリビングの奥を案内する菅野さんを、西日が射した。25人も避難者を受け入れられた大きな家。築180年の古材と塗り壁、引き戸がモダンをかもし玄関前に立つ菅野さん。母屋は地震の被害もなく、動物が入り込む被害にもあっていない。放射能さえなければ今でもそのまま住めるという。菅野さんの家の前を通る国道114号線は現在は通行可能となっているが、この津島地区は全体が帰還困難区域であり、菅野さんの墓地に行くために国道から脇に入るゲートを開けてもらった。

こうした写真からも、福島の実情の一端を見ることができる。

「復興五輪」などと浮かれているのか。写真を見ながら、あらためて考えさせられた。



(2020年1月11日)